

[ちくほう地域研究]

直方市の近代化遺産と
その問題点筑豊地域研究会会員
牛嶋 英俊

はじめに

近代化遺産とは、近年提唱されるようになった比較的新しい概念で、一般には幕末から昭和二〇年ころまでに建造され、わが国の近代化に貢献した産業・交通・土木の遺産と定義づけられる。

文化庁は、平成二年度から現況把握のための調査を開始し、翌三年度からは福岡県も事業に着手した。筆者はこのとき調査委員六名の下で構成する十三名の調査委員の一人として参加したが、初回の会合では、これまで対象外であった近現代を扱うことへのとまどいと、文化遺産調査の新たな展開への期待や高揚感が混在していたことを昨日のように覚えていいる。

調査の成果は、平成五年（一九九三）に『福岡県の近代化遺産』（福岡県文化財調査報告書 第一一三集）として刊行された。このときは八三カ所

の報告にとどまったが、その後の自治体などの調査により、対象は格段に広がりを見せてきた。さらに、いわゆる世界遺産の対象としても北部九州の製鉄・炭鉱遺跡が注目されることとなり、各地で活発な調査や啓蒙活動が展開しているのは周知のことである。

本稿では、遠賀川中流に位置する直方市における近代化の歴史をしめす代表的な建築と構築物を紹介し、これらの置かれた問題点について若干の私見を述べる。

直方市街地は江戸時代の初頭に福岡藩の支藩・東蓮寺藩の城下町として成立し、中期以降は長崎街道が通過する商業地として続いた。明治以降は筑豊炭田の石炭を集荷・輸送する拠点として発展し、広大な敷地と関連施設をそなえた直方駅は、その中核として機能してきた。同市における近代化遺産も、まず鉄道・石炭関係から見てゆくこととなる。名称は現況にしたがい、括弧内に旧称をしめした。

一、JR直方駅（旧国鉄直方駅） 山部二六・二

石炭積出し港である若松と直方をむすぶ筑豊興業鉄道が開通したのは、明治二四年（一八九一）八月である。これは国内の鉄道としてはきわめて早い時期にぞくする。この時の直方停車場は現在よりやや南方にあった。現在の駅舎は二代目にあたり、明治四三年（一九一〇）の竣工である。（写真1）

駅舎は、ステイック・スタイルを基調とする木造平屋寄棟の瓦葺建築で、平面の四周に下屋を巡

らせ、これを列柱で支えている。

本屋東側正面の中央に切妻の玄関車寄せを配する。胴張りを持

つ三本一対の支柱を立て、重厚感を出す。破風の妻飾りはアー

ルヌーボー風の円弧を描くス

テイック（棒状材）と縦羽目板・斜め羽目板で構成している。

（写真2）

このような外

観は鳥栖・上熊本などの駅舎に先行し、いずれも相似た外観と規模である。換

言すれば、駅舎

は地域の拠点駅舎として共通する規模構造で作られたことになる。したがって、直方駅は当時の駅舎建築の典型であると同時に、残存する数少ない現役の明治期駅舎建築としてきわめて貴重な存在といえる。（写真3）

また、駅舎は初代博多駅からの移築とする説もあり、この点も今後検討されるべきであろう。二



写真2・直方駅車寄せ付近



写真1・建築当初の直方駅

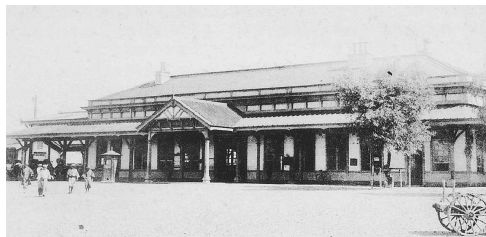


写真3-1・類似する駅舎・小倉駅



写真3-2・類似する駅舎・久留米駅

〇一一年現在、直方駅周辺は駅舎の撤去を前提とした再開発の計画が進行している。駅舎は歴史的に貴重な建築であると同時に、地域の発展を担ってきたランドマークとしての意味も大きい。経済効率を優先させる拙速な「開発」は、将来に大きな禍根をのこすと思われる。

二、直方石炭記念館本館（筑豊石炭鉱業組合会議所） 大字直方六九二一四

明治四三年（一九一〇）に当時の筑前と豊前地域の炭鉱業者からなる筑豊石炭鉱業組合の直方会議所として建造された。第二次大戦中には石炭統制会・九州石炭鉱業協会などの所屬となり、戦後の昭和二十七年には九州炭鉱救護隊連盟の直方練習所となった。この時代の練習用模擬坑道は、建物の裏側に現存する。建物はその後昭和四四年に直方市に寄贈された。

本館は、木造二階建て瓦葺きの洋風建物で、延床面積は約二八六平方メートル。西側は寄棟、東側は切妻屋根である。アーチ型の入り口を北に開く。一階の底は



写真4・建設当時の会議所

なく、周囲に胴蛇腹をめぐらす。東外壁に突出する煙突があるが、全体に凹凸や装飾的要素のないシンプルな外観をしめしている。（写真4）

館内は展示室に使用されているが、天井のシャンドリアや階段の手すり、マントルピースなどに往時の面影をとどめている。平成二年には築百年を記念して、「産業遺産活用による地域活性化を目指す」シンポジウムがひらかれた。（通産省認定近代化産業遺産・市指定有形文化財）

三、坑夫の像 溝堀一の一

キャップランプをかぶり、足にゲートルを巻き、削岩機で石炭を掘る炭坑夫の像である。昭和二九年（一九五四年）年に地元有志の発案で造られた。像本体の高さ二・四メートル、製作は直方出身の彫刻家・花田一男による。（写真5）

当初、坑夫像は市の玄関口にあたる国鉄直方駅前に設置され、半世紀近く石炭と共に栄えた地域のシンボルとして市民に親しまれてきた。通称「炭掘る戦士像」。台座の銘には「明るい未来に生きる直方市を表現した」とある。

平成八年（一九九六）、駅前ロータリーの改修にともない、現在地である遠賀川と彦山川の合流点ちかくの公園に移された

が、このとき市民から移設についての疑問や反対の声が多くあがった。移設先は当初石炭記念館敷地とする案もあったが、結局は当時まだ未整備で人影もまばらな現在地となった。移転の理由のひとつに、像が老朽化して危険とされていたが、像はクレーンによる吊り上げや移動に十分に耐える強度を示した。

この一件には、石炭産業を地域の「負の遺産」ととらえ、関連する事物を「なかったもの」にしようとしていた当時の行政の姿勢が如実にあらわれていた。そのような経緯からも、坑夫像は石炭と町のかかわりを伝えると同時に、町の景観を形づくる歴史的な遺産の取りあつかいについて一石を投じたモニュメントでもある。（写真6）

四、江浦耳鼻咽喉科医院 殿町一〇一三八

設立者の江浦栄斉は明治三四年に鞍手郡吉川村乙野（宮若市）から当時の直方町に出て開院した。



写真6・坑夫像の現状



写真5・駅前の坑夫像

同四三年、東京から帰省した甥の藤六合雄（明治一八生）が耳鼻咽喉科を併診した。貝島太助の要請によるといい、太助は殿町地区に医院を集め、一帯を医療センター地域とする構想があったようだ。

医院は明治三四年（一九〇一）に竣工した木造瓦葺き建物で、二階建ての本館・旧病棟と、平屋の付属建築からなる。全体的には和洋折衷の建築様式であり、建物のみならず、御影石の門柱や切石敷きの玄関アプローチなど、外観全体に建設当初の面影をよく留めている。

本館は北側の診療室部分と、南に取りつく玄関・受付部分からなる。建物外壁は、仕上りの板表面が垂直となるいわゆるドイツ下見板張りで、白ペンキを塗る。

（写真7）



写真7・江浦医院玄関付近

当医院は明治三四年の建設だが、様式としては明治初期の開化式擬洋風建築である。明治三〇年代は直方の町が石炭産業で急成長をとげた時代でもあり、その意味で時代を象徴する建物とも言える。また創建以来、今日まで一貫して医院として使用されていることも



写真8・江浦医院の全景

あつて、内外観ともに当時の姿を良好に残す。高い装飾性を持つ端正な姿は、地域の代表的な明治期建築として貴重な存在である。（写真8）

五、向野堅一記念館（讀井小児科医院） 殿町一

二一九

設立者の讀井源次郎は福岡市の出身。貝島太助に請われて明治四〇年にこの地に移った。当初は、内科・胃腸科・歯科をそなえた総合病院として発足、一時期洋裁学校に使用されたが、その後小児科医院となり、平成八年に閉院した。（写真9）

建物は大正一一年竣工した木造モルタル造り二階建ての近代ルネサンス式擬洋風建物で、北東角に塔屋をもち、一部三階となる。

塔屋に接して建物正面の右寄りに玄関があり、上部はバルコニーとなっている。屋上周囲にはパラペットが巡り、縁取りをもつ方形の装飾がつく。（写真10）



写真9・大正時代の讀井医院

全体的な外観は、大正五年に福岡県庁向かいに竣工した商品



写真10・旧讀井医院の北面

陳列所（のち福岡県産業奨励館と改称）によく似ている。木造と赤煉瓦造りとの違いがあるが、共通する意匠といえる。

閉院後、建物は個人が買収し、平成二三年に地元出身の軍人・財界人である向野堅一記念館として開館した。

六、直方谷尾美術館・本館（奥野医院） 殿町一〇

三五

奥野太一郎が大正二年に直方で開業して以来、ながく皮膚科・泌尿器科の医院として続いたが、平成二年に閉院した。その後、建物は地元企業家・谷尾欣也が買収し、平成四年に自己のコレクションを展示する私設美術館となった。同一年に谷尾氏死去のあと直方市に寄贈され、一三年に市立直方谷尾美術館として開館した。

医院の初代建物は昭和一五年に火災で全焼し、今日のこる建物は翌一六年の再建である。本屋は木造の二階建て洋風建築で、正面中央部にひらく玄関上には装飾帯を配した庇がつくられ、これを支える両側壁の前端は柱頭飾りのある円柱となっている。一階と二

階窓の間には方形枠内に植物意匠を配した装飾がある。

（写真11）初代建

物は正面屋上に三角屋根をもつ洋風の二階建て、二本の支柱をもつ張り出した玄関部分な



写真11・旧奥野医院外観

ど、再建された建物と共通する外観をもつ。

(写真12)

本建物は建築

年代はやや新し

いが、大正初年

の初代建物のイ

メージをひきつ

貫して地域医療

にたずさわった

個人医院の遺産



写真12・初代の奥野医院

七、(名) 石原商店本社 殿町二二二三

建物の本屋は大正一五年の建築と伝え、木造二階建て切妻の瓦葺建築である。間口は五間あり、俗にいう「矢どめ」の構造をとる。

瓦葺の軒上はガラス窓であり、その上に銅板張りの庇がある。二階前壁はほぼ全面に木枠のガラス戸があり、周囲を額縁状に銅板で囲む。戸袋や外扉の設けられていた形跡はない。二階軒下は垂木を露出させず、

四段にせり出して銅板で包んでいる。(写真13)

一階店内は柱が少なく。当初は真鍮であったという鉄柱のほかは、後補と見られる細い木柱



写真13・石原商店本社外観

一本のみである。四周の壁には手すりのある回廊状の吊棚がめぐる。軒上のガラス窓は、吊棚部の採光として機能している。

二階は田の字形に部屋を配し、床の間・仏壇をもつ座敷がある。

本屋の奥には木造二階建てづくく長大な三階建瓦葺き建物があり、一部は半地下室となつてい

る。かつてはこの建物全体で五〇人ほどが商品

である装粧品の製造にたずさわっていた。(写真14)

内部はいくつもの部屋に分かれ、作業室だけでなく材料の染色場・鍛冶場まで完備している。屋内で一貫した生産がなされていたことがわかり、現存の建物は店舗のみならず、大正・昭和初期におけるマニファクチュア(工場制手工業)施設の全体が良好な形でこの貴重な例といえる。



写真14・石原商店の工場

八、(株) 前田園本店殿町店 殿町二二二三

前田園の創業者前田長吉が、大正一二年頃から三年かけて建設した。長吉は明治三〇年(一八九七)ころ直方へ移住した博多商人である。その縁で、建設には博多の大工があつた。

本店建物の本屋は木造二階建て切妻の瓦葺建築で、屋号入りの石州瓦を葺く。石原商店と同様、「矢止め」の構造をしめす。(写真15)

一階前面は間口中央の左寄りに柱を持つのみで、ほかは吹抜けの開放的な造りである。敷居上部にもガラス窓があり、店内の採光となつている。



写真15・前田園本店の外観

二階前壁は黒漆喰で、腰と窓枠に銅板を張る。窓はデザイン化した草花模様ガラスが入った木製で、建設当時からのものである。戸袋や外扉は設けられていない。二階軒下には装飾的な軒受け材が突出し、垂木と同様に先端部を銅板で包む。

店内の柱は店頭のほかに八寸角の大黒柱と他の一本のみであり、天井の高いこととあわせ、広い内部空間を形成している。二階への階段は店の左奥にある。もとは天井の中央部は吹抜けで、二階部四周には銅張りの手すりが巡っていた。

隣接する前田園と石原商店がほぼ同じ間口・規模であるのは、旧料亭の跡地を分割して購入し同時期に着工したことによる。両者は施工者の相違による外観のちがいはあるが、窓枠を囲む銅板や鴨居上の採光窓など共通の技法が見られる。いずれにせよ、並立する二軒の店舗建築は、大正期の直方の経済力をよく示す格式ある建物であり、景観的にも貴重な存在である。

九、直方谷尾美術館別館（福岡銀行南支店） 古町

一〇・二〇

福岡市で開業した十七銀行の直方支店として大正二年（一九一三）に建設され、昭和二〇年の合併により、福岡銀行直方南支店となった。ながく市の中心的商店街の金融機関として営業してきたが、平成九年に支店の統廃合により閉店した。

閉館後の平成九年に谷尾欽也氏が購入し、ガラス工芸コレクション

ンを展示する美術館「アートスペース谷尾」に改装された。同一二年に谷尾氏死去の後にはコレクションとともに直方市に寄贈され、一五年に直方市美術館別館として開館した。

(写真16)



写真16・谷尾美術館別館の外観

建物は二階建てで、表面はタイル貼りとなっている。今は失われているが、かつては軒回りにパラペットがめぐり、高さを強調していた。軒下、窓の周囲にも装飾的なデザインがこらされ、華やかな印象の外観であった。

交差点に面する建物東南角は一部張出して平面八角形の

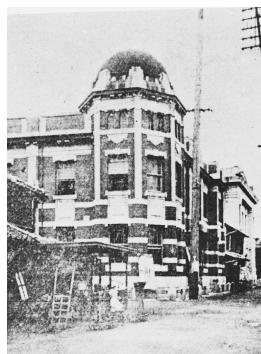


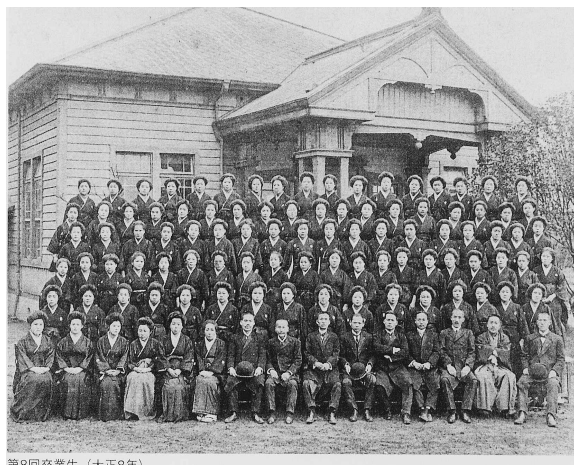
写真17・十七銀行時代の外観

搭屋となっている。かつてはその屋上はドームとなっていて、町のランドマークであった。（写真17）（経産省認定近代化産業遺産）

一〇、大和青藍高等学校第二体育館（直方高等女学校講堂） 日吉町四五―一四

大正三年（一九一四）に県立直方高等女学校の講堂として落成、ながく使用されてきた。（写真18）その後、昭和四〇年（一九六五）に学校法人大和学園が購入、講堂兼体育館として使用してきた。昭和五四年からは第二体育館と改称、今日にいたっている。

その間、正面入り口の車寄せが撤去されるなど内外の原型を一部損ねているが、管理がゆきとどいており、とくに天井部は旧状をよくとどめている。



第8回卒業生（大正8年）

写真18・直方高等女学校時代の講堂

建物は直方高女当時は正門を入って右手に位置していた。木造平屋寄棟のスレート葺き建築で、かつては西向きに車寄せがあった。落成当時の写真では、車寄せは基壇上に三本一對の角柱からなる支柱を立て、切妻屋根をのせる。建物外周は横板張りによるが、腰部分は縦羽目板となっている。内部の床は張り替えられているが、天井部の保存は良好である。壁の上端から内側に曲線をもって折上げ、その上に天井面をつくる。格縁を四周させ、その内部を桁行き方向に四分割、梁間方向に二分割し、これと四五度方向を違えて二カ所に方形区画をつくり、シャンドリアを吊すようになっていた。格縁の八カ所に設けた通風口には植物紋を透かし彫りするなど、意匠をこらした仕上げとなっている。（写真19）

本建築は

二〇一四年

に築百年を

迎える。市

内において

明治・大正

期の木造学校建築がほとんど失われた今日、保存状態が良好で意匠的にも秀逸な近代教育の遺産として、将来にむけての保存がのぞまれる。

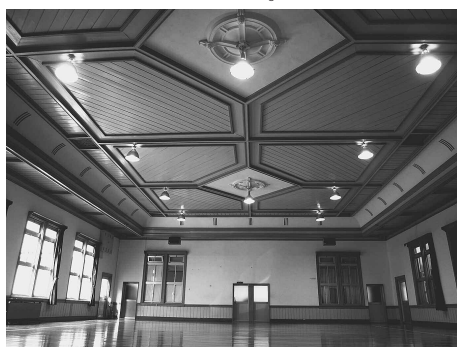


写真19・大和青藍高校第二体育館の内部

おわりに

以上、直方市内の主な近代化遺産について概略を述べた。このほかにも市内にのこる近代化遺産は、現在民間の作業場に使われている明治三七年（一九〇四）建造の初代直方郵便局舎や、明治二五年（一八九二）に竣工しイギリス積煉瓦橋脚をもつ平成筑豊鉄道（旧伊田線）嘉麻川橋梁などがある。

これら近代化遺産は、地域の近代のあゆみを今に伝える歴史の証人であるとともに、町並みや景観を形づくる重要な要素でもある。しかしながら従来、古い建物や施設は経済効率の名の下に次々と破壊改築され、多くの由緒ある遺産や町並みが消滅してきた。公害復旧事業による市内植木の町並みの壊滅的な変貌も、その一例にすぎない。その意味で、直方市の戦後復興の半世紀は、一面「町殺しの時代」でもあった。

今日にいたって、行政は「レトロタウン構想」を打ち出し、国の重要伝統的建造物群保存地区（いわゆる重伝建）への選定にむけて準備活動をはじめた。事業を推進する市の産業振興課は「地域ぐるみで古い町並みを守るという意識を高め」云々と町並みの歴史的景観にも配慮する姿勢も示している。（写真20）

その一方で、おなじ百年の歴史をもちながら解体の危機に瀕している直方駅舎と、築百年記念のシンポジウムが開かれた石炭記念館本館の扱いを見れば、市民の自発的な要望や文化財の価値判断よりも行政の恣意的な選択が優先していることが明白である。したがって、そこに真の意味での近代化遺産の保護や活用に多くを期待することは



写真20・2009年5月24日読売新聞

難しい。

地域の景観や歴史遺産の保存・活用については、行政や歴史・建築の専門家のみならず、市民みずからが生活空間や景観の問題に関心を深め、自発的な発言を続けてゆくことが必要と思われるのではない。

参考文献（番号は本文の項目に対応する）

- 一・福岡県教育委員会『福岡県の近代化遺産』一九九三
- 博多駅編『博多駅六十五年史』一九五五
- 日本国有鉄道九州総局『九州の鉄道の歩み』一九七二
- 河崎孝夫編『九州の鉄道100年記念誌 鉄輪の轟き』一九八九
- 直方市史編纂委員会『直方市史・下巻』一九七八
- 二・行実正利編『写真集直方』国書刊行会 一九八五
- 三・直方郷土研究会『坑夫像移設問題』『郷土直方』

25号 一九九六

直方郷土研究会『坑夫像を考える特別号』『郷土直方』26号 一九九六

四・藤晴江編『江浦医院創立百周年誌』二〇〇一

五・直方市医師会編『直方市医師会の歩み』一九八二

六・直方市編『直方市制施行記念帳』一九三一

直方市医師会編『直方市医師会の歩み』一九八二

七・筑豊近代化遺産研究会編『筑豊の近代化遺産』二〇〇八

八・筑豊近代化遺産研究会編『筑豊の近代化遺産』二〇〇八

九・直方市教育委員会『直方市文化財調査報告書第17集』一九九五

十・百年史陵江編集委員会『百年史陵江』二〇〇四

四

校誌編集委員会『大和青藍高校創立100周年記念誌』二〇〇八

直方市史編纂委員会『直方市史・下巻』一九七八